

ました。2年次後期のあわただしさとは一転、比較的のんびりとした学校生活となり、それぞれが部活などの学業以外に打ち込む余裕ができ、どこか陰しい表情だった学友たちの顔も心なしかおだやかな様子になったように見受けられます。さて3年次になったとは言いますが、年配の臨床の先生いわく、昔はいまの医学部3年次を“学部1年生”と呼んでいたとのこと。入学当時の初心にかえり、「ようやく“医学部”に入学できた」という気持ちで気を引き締めていかななくては、と感じています。

そんな“初心”を振り返ることができた経験をお話したいと思います。

わたしは春休みの期間中に沖縄協同病院に実習生として受け入れていただきました。実習生とはいつでも2年次終了時程度の知識などたかが知れているというもの。そんなわたしにも丁寧なことばをかみ砕き、わたしが持ちうる概念を組み合わせで説明してくださった先生方、医療スタッフの方々



に心から感謝しています。

実習の内容はというと、3日間の期間内に朝8時から夕方5時まで産婦人科、小児科、麻酔科、総合内科、循環器科、地域の往診などさまざまな診療科を見学させていただき、各科では先生の脇にくっついて必死にメモを取りながら同行させていただきました。各病棟で病と闘う患者さん、患者さんを想う家族のみなさん、そして患者さんを治療するために必死に頭をめぐらせる先生方の姿には、強く心を動かされるものがありました。また手術の見学、特に帝王切開による出産に立ち会い、新生児と母親の初の対面を目の当たりにした経験は、今思い出してもあたたかい気持ちと涙とがこみ上げてくる思いがします。

“初心”を思い起こさせてくれた経験は、2日目の救急外来を見学したときにありました。夕方5時半から救急処置室に降りたのですが、すでに病床には数名の患者さんがおり、担当の先生方に挨拶をしている間にも受け入れ打診の電話が鳴りひびいていました。高所転落や突然の意識消失で運び込まれる患者さんに対し、7、8名の医療スタッフがそ

れぞれに役割を担い協力し合って治療に臨む様子は、テレビドラマにたがう事のない緊迫感を感じるものでした。そんな中、胸痛と麻痺を訴えておばあさんが搬送されてきました。早急に各種検査が実施され、急性下壁心筋梗塞との診断がおりICUへ移されることになりました。その待ち時間の間も患者さんは右手のしびれをくりかえし訴えていたので、せめて自分ができることだけでも、とわたしはその右手を手に取りもみほぐしてあげました。すると痛みでそれどころではないはずの患者さんが、わたしのほうへ頭を起こして「ありがとう」と言ってくれました。そのひとことにハッといつの間にか忘れていた気持ち、そうだ、この「ありがとう」が聞きたくて自分は医学の道を志したのだ、ということ思い出しました。胸が熱くなると同時に、わたしのほうこそ感謝したいという気持ちでいっぱいになりました。一緒にベッドを押してICUに向かい、そして別れ際で手を離すときに「きっと良くなるからね」と願いをこめて声をかけました。

「ありがとう」のひとことで、朝から動き回ってたまっていた疲労感もすっと消えていったような気がします。おそらく今日も多忙な医療現場で働くみなさんも、そんな「ありがとう」に励まされて今もがんばっているのではないかと思います。わたしは、“初心”を思い起こさせてくれたあのおばあさんの「ありがとう」を胸に、“学部生1年生”とし



て学友たちとともにがんばっていこうと思います。

2年生の近況報告

熱田真穂(2年次)

春。今年も入学式がやってきました。1年前、スーツ姿で期待と不安をもって大学生となった私たちは、無事2年になり、新入生を迎える立場となりました。

毎年恒例のかりゆシーサー制作にみんなで奔走した後は、新入生オリエンテーションに部活の勧誘、新歓飲み会の幹事など、多くの2年次が新歓イベン